

## 6. 岩座神地区の棚田調査報告

京都府立大学文学部地理学研究室

### はじめに

兵庫県多可郡多可町加美区岩座神には「日本の棚田百選」にも選ばれる美しい棚田景観が広がる。本稿では令和4年（2022）度を実施した岩座神地区に関する調査のうち、聞き取り調査および目視による棚田石積み調査の結果を報告することにした。

本稿に係る調査の概要は以下の通りである。

#### ①令和4年（2022）8月10日（文化遺産フィールド実習の一環で実施）

##### ・石積みの状況調査（9:30～12:00）

調査者：諫早直人、井上直樹、上杉和央、岸泰子、東昇、菱田哲郎（以上、教員）  
長谷川巴南、守田悠（以上、修士1回）、石川達葵、岡崎壮太、小原万侑、  
小島慧音、島村朱音、橋本唯、廣野勝、藤田尚希、本田龍平、山下悠衣奏、  
依田萌奈、（以上、学部2回）

##### ・聞き取り調査（1）（13:00～14:30）

インフォーマント：木原美雪氏、木原伸子氏

聞き取り場所：岩座神地区公民館

調査者：上杉和央、島村朱音、藤田尚希、本田龍平

##### ・聞き取り調査（2）（13:00～14:30）

インフォーマント：木原均氏、木原伸夫氏

聞き取り場所：岩座神地区公民館

調査者：井上直樹、岡崎壮太、小原万侑、山下悠衣奏、依田萌奈

※もう一組の聞き取り調査は、主に五霊神社に関する内容であるため、ここでは情報を割愛する（別章を参照のこと）。

#### ②令和4年10月9日

##### ・石積みの状況調査（10:00～11:00）

調査者：井上直樹、岸泰子、石川達葵、橋本唯、廣野勝、藤田尚希、山下悠衣奏

#### ③令和5年2月12日、13日

##### ・石積みの状況調査（12日：16:00～17:30、13日、9:00～10:00）

調査者：上杉和央、廣野勝、藤田尚希、山下悠衣奏

調査第1回目の令和4年8月10日には、石積みの状況調査と聞き取り調査とをおこなった。石積みについては19名が6班に分かれ、岩座神地区の中下流部の石積みを分担して調査した（図1）。



図1 調査風景 (2022/08/10 撮影)

確認項目は積み石の石質、積み方、勾配のとり方、隅角部の構成、灌漑設備の有無、「ニンジュウ」の有無、間隙の植生、孕み等危険個所の有無の9項目で、主に区画一辺ごとに調査シートを作成した。なお、稲刈り前の時期で石積みに近づくことが難しい場所も多かったため、実測などはせず、道端からの目視による確認が基本となった。その後、10月と令和5年2月に追加調査をおこない、中上流部の石積みについても同様に調査した。

聞き取り調査では、棚田や石積みのことに加え、岩座神地区の食文化や農業について地域住民の皆さまから話をうかがった。(藤田尚希・上杉和央)

## 1. 岩座神地区の石積みについて

### (1) 石積みの歴史

岩座神地区の石積みは歴史が古く、鎌倉時代に造作がはじまり江戸時代には集落の概形ができていたといわれている(岩座神地域協議会, 2016)。このような伝承を裏付けるものの1つに、神光寺遺跡の発掘調査があげられる。神光寺は真言宗の寺院で、岩座神地区の北部、標高1,005mの千ヶ峰の中腹に位置する。寺域の南側の約8,100㎡における滞在型市民農園施設「クラインガルテン岩座神」の建設計画に伴い、平成13年(2001)度に加美町教育委員会が発掘調査をおこなったところ、多数の石積み遺構が確認された。報告書(加美町教育委員会, 2005)によると、石積み間の埋土や裏込め(積み石の奥に詰められる小石)から13~18世紀の遺物が発掘され、特に14~15世紀の遺物が集中していることから、この200年間に大半の石積みが築かれたと判断されている。また、既存の石積みを埋め立てて前方に新しい石積みが築かれていることから、幾度かの改修を受け平坦地の拡張がおこなわれていたことも明らかになった。このような神光寺の寺域開発で培われた石積みの技術が、集落の棚田の石積み造作にも反映された可能性がある。

### (2) 現在の石積み

一般的に、棚田の草刈りは棚田の維持管理のなかでも負担が大きい作業とされている。特に法面の草刈りは急斜面での難しい作業になるうえ、段差が高い場合、法面の中央部が法先からの草刈りと天端からの草刈りでは届かないこともある。そこで、石積み法面で区間段差が高くなると、長い石を石積み法面に差し込み足場を設けるなどして、高い法面中央部の除草がおこなわれる場合がある(岡島, 2014)。平成11年(1999)に岩座神地区で聞き取り調査をした中島峰広は、法面に設けられた足場を岩座神地区では「ニンジュウ」とよび、うち先述のように長い石を法面に差し込んだものを「トビジュウ(飛び重)」、法面に小段をつけるものを「タナジュウ(棚重)」と呼ぶ、と報告している(中島, 2004)。

また、石積みの柵田では、石積みの下部に1m四方程度の開口部が設けられる場合がある。これには、灌漑用水の確保と排水による水田の乾燥化の2つの目的があると考えられている（恵那市教育委員会, 1999）。岩座神地区ではこのような開口部のことを「ガマ」と呼ぶ（岩座神地域協議会, 2016）。



図2 石積みに育つチャノキ  
(2022/08/10 撮影)

## 2. 聞き取り調査

ここでは、令和4年（2022）8月10日に実施した聞き取り調査から得られた内容のうち、岩座神地区の石積みと深く関わる部分をまとめておく。

### 1. 石積みの歴史について

- ・古い石積みは鎌倉時代に遡ると言われている。誰がどのように積んだかはわからない。

### 2. ニンジュウについて

- ・呼び方は「ニンジュウ」で、漢字はわからない。「タナジュウ」と「トビジュウ」といった呼び分けはしていない。
- ・石積み自体は上の土地の所有者のものである。ニンジュウがある場合の法面の草刈りは、ニンジュウより上は上の土地の所有者が、ニンジュウより下は下の土地の所有者が担当する。
- ・法面の石積みにチャノキが育っているところがある（図2）。ニンジュウより上は上の土地の所有者に、ニンジュウより下は下の土地の所有者に、それぞれ茶葉の摘採の権利が与えられる。

### 3. 茶の生産について

- ・法面のチャノキは、自然に生えてきたものか人工的に植えられたものかはわからないが、新しく植えた記憶はない。
- ・かつては各家がチャノキから茶葉を摘んで茶を一斗缶分ほど作り、自分の家で飲んだり親戚や知り合いに配ったりしていた。最近では茶を作る家は少ない。木原美雪氏と木原信子氏の家は作っている一方、木原均氏、木原信夫氏は昭和50年、60年頃までは茶葉を摘んでいたが、現在は不要な雑木として刈り取っている。

### 4. 石積みの整備について

- ・草刈りは定期的におこなわれるが、一斉にするわけではない。
- ・大学の学生や企業の職員がボランティアとして草刈りに参加することもある。
- ・石積みは崩れることがよくある。コンクリートで補強している場合でも崩れることがある。
- ・石積みは上の土地の所有者に修繕義務があるが、昔から岩座神には石積みを修繕する技術をもっている人はほとんどいなかった。石積みが大きく崩れた場合は業者に依頼するが多い。
- ・かつては効率化のために石積みを崩し、田を結合させ機械が入りやすいように土地を拡大した事例もある。積み直しの作業負担が大きいいため、拡大すると法面は土羽になる。（藤田尚希）

### 3. ニンジュウの分布

#### (1) 分布調査について

聞き取り調査から、岩座神地区のニンジュウは単なる草刈りの足場に加え、利用の権利、義務の領域をも区分する役割を担っている重要な設備であることが明らかとなった。ここでは、現地での目視調査をもとに現在のニンジュウの分布をまとめ、その成立や特徴についてまとめる。

分布図には多可町所蔵地図をトレースした図を基図として使用する。多可町所蔵地図の具体的な作製年代は不明だが、五霊神社南側の農道や公民館西側の道路整備が地図上ではまだ計画段階である。また、岩座神地区北部のクラインガルテン岩座神の範囲が地図上で整備されていないことから、少なくともクラインガルテン岩座神が竣工する平成14年（2002）以前の製図であることは確実である。このように現在の区画と異なる部分があつかみられるものの、岩座神地区の棚田には大きな耕地整理は入っておらず、全体としては棚田の状況の把握が可能である。また、区画ごとに振られている番号が、明治期に作製された岩座神地区所蔵の地籍図（別章を参照のこと）に加筆された地番と対応しており地籍図との比較が容易にできることもあり、本図を基図として利用することにした。

分布図を作るにあたり、地籍図の区分を参考に、岩座神地区の集落を「藤之迎」、「九郎右エ門田」、「竹之本」、「森垣内」、「竹之華」、「クゴ」の6つの字区に分けた（図3）。そして、状況調査で作製した調査シートをもとに、字区ごとにニンジュウが存在する石積みを示すとともに新たに番号を振っていった。

ニンジュウについては、分布と同時に起源についても不明な点が多い。岩座神地区の石積みについては、耕地の最頂部の発掘調査において、先述のように14～15世紀頃に大半が積まれたと推定される石積み基礎が確認されており、石積みによる整地がなされていたことが明らかにされている（香美町教育委員会,2005）。ただし、基礎部の数段しか残されておらず、この頃にニンジュウがあったかどうかは不明である。

一方、文献史料や絵図史料を用いた棚田や石積みの歴史に関する検討は、いまだ十分に進められているとは言えない状況にある。そこで、今回は岩座神地区で確認できた明治期地籍図史料の記載内容と現在の棚田の状況——とりわけニンジュウのある地筆の状況——とを比較し、ニンジュウが当該期にまで遡りうるかどうかについての検討を試みた。

#### (2) 調査結果

今回の目視調査においては、地域でニンジュウが41か所で確認できた（類似施設を含む）。岩座神地区の棚田の全体にわたって調査を実施した点に一定の意義を見出すことはできるだろう。ただし、一部ではあるが草木の繁茂で十分に視認できなかった場所や、ニンジュウのような構造が石積みの一部に確認できたものの近づいての判定ができなかった場所もある。判定があいまいな場所は、今回の図示からは除いた。そのため、実際は41か所よりも多い可能性がある。

以下、地籍図に示された字ごとに比較結果を示す。なお先述のように、中島（2004）は、ニン

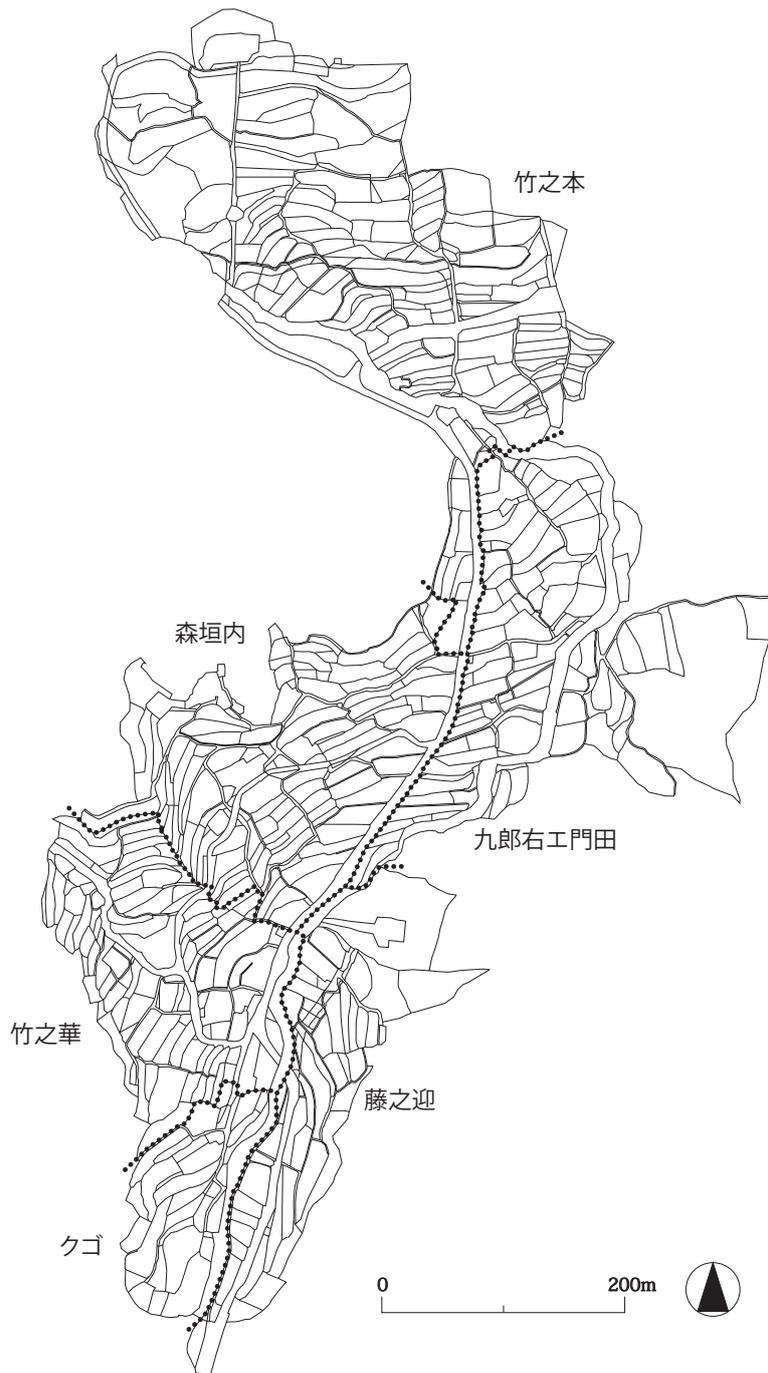


図3 岩座神の地区区分

ジュウには間隔をあけて石を飛び出させるタイプと、法面に小段をつけて歩行可能とするタイプがあり、地域では前者が「トビジュウ（飛び重）」、後者が「タナジュウ（棚重）」と呼ばれていると報告している。本稿でもこの区分を採用することにした。ただし、今回の聞き取り調査においては呼称の区別を聞き取ることはできなかった。また、トビジュウとタナジュウの中間的な特徴、すなわち間隔を空けずに連続的に石を突出させる特徴を有する施設も複数確認でき、必ずしも2つが明確に分けられる形状をしているわけではないことも判明した。中間的なものについて、分布図ではタナジュウ



図4 藤之迎のニンジュウ分布

の際に積み直されている可能性がある。

#### ②九郎右エ門田

タナジュウが5か所で確認できた(図6)。

1の上段面は明治期に水田として利用されており、合筆などは確認されない。タナジュウは地筆東南部に確認できるが、現在、境界線には農道が敷設されている(図7)。明治期は「溝」とあり、後に農道整備がなされたことがわかる。部分的であり、タナジュウを利用した移動は困難である。2の上段面は明治期に水田として利用されており、合筆などは確認されない。2は二重に小段(タナジュウ)が設けられており、特異な法面形状となっている(図8)。3の上段面はもともと田として利用された一筆であるが、幹線路に近い一角に倉庫が立てられたことで、一筆内での土地利用が変化している(分筆されているかどうかは不明である)。明治期、3の下段は宅地と畑地となっていたが、現在は畑地部分も宅地として利用されている。3の石積みは住宅の1階の軒高までである(図9)。4の石積みは高い(図10)。上段面は明治期に田として利用されており、一段上の地筆との間に溝が通っていた。その溝は現在も確認でき、上段との合筆などはなかったことがわかる。



図5 藤之迎1 (2023/02/12 撮影)

として表現したが、現在の地域住民の認識も含め、ニンジュウの細分については検討の余地がある点、断っておきたい。

#### ①藤之迎

トビジュウが1か所で確認できた(図4)。

トビジュウ1(図5)では、一部に突出した石が断続的に続いている。石積みの傾斜はトビジュウの上下で異なる。1の上段面の地筆は明治期の地籍図では3筆となっており、いずれも田に利用されていた。地籍図には、それらが「合筆」された旨が鉛筆により加筆されている。石積みは合筆



図6 九郎右エ門田のニンジュウ分布



図7 九郎右エ門田1 (2023/02/12 撮影)



図8 九郎右エ門田2 (2023/02/12 撮影)

### ③竹之本

タナジュウが1か所、トビジュウと構造が似る施設が1か所で確認できた(図11)。

タナジュウ1(図12)の上段面は明治期から水田として利用されており、その後の合筆などは確



図9 九郎右工門田3 (2022/10/09 撮影)



図10 九郎右工門田4 (2023/02/12 撮影)

認められない。竹之本で明確に確認されたニンジュウはこの1か所だが、その他、森林地に近い場所の一部で、判定はできなかったがニンジュウの可能性のある石積みがあった。

2はトビジュウの凡例で示したが、通常のトビジュウとは異なる。すなわち、図13のように階段状に突出した石が配置されており、下段と上段の耕地を往来する機能を有している。2の下段前面は、現在、舗装路として整備されているが、明治期には下段にも耕地があり、畑地として利用されていた。この畑地と2の上段面の水田とを接続するものであったと思われる。

#### ④森垣内

地区内にニンジュウが18か所確認された(図14)。森垣内は岩座神地区のなかでもっともニンジュウが集中して分布する地区となっている。

1～3の付近は岩座神地区の棚田の中でも斜面が急な地区となっている(図15)。地籍図にも同じ地筆が確認でき、明治期にすでに水田として利用されていた。4の上段面のうち東側は明治期より宅地として利用されており、現在も同じ土地利用である。西側は明治期には水田であったが、現在は宅地と畑地となっている。いずれも法面に変化は認められない。4は法面に小段がついているが、小段面の石はいずれも突出しており、一般的なタナジュウとは構造が異なる(図16)。5の西側は舗装路の壁面となっており、道路改修の際に石積みも改修されたものと思われる(図17)。東側の上段面は明治期に水田として利用されており、東側は里道が通過していた。現在、上段面の一角には防火水槽の設置がみられ、また明治期の里道が拡幅され舗装路となっているものの、区画自体に大きな変化はなく、東側は明治期から変化がないと思われる。6の上段面は明治期に水田として利用され、合筆などは確認されない。6は調査時、法面に草が多く生えていた(図18)。なお、6の法面は西側に連続しているが石の積み方が異なり、タナジュウは連続していない。

7の上段面は明治期に水田として利用されており、その後の合筆はない。現在は舗装路に面している。明治期も前面には溝と里道が通っていたため、関係性に変化はないが、里道の拡幅が想定されるため、拡幅に伴い、石積みが積み直されている可能性がある。7の石積みは調査時、全面草に覆わ

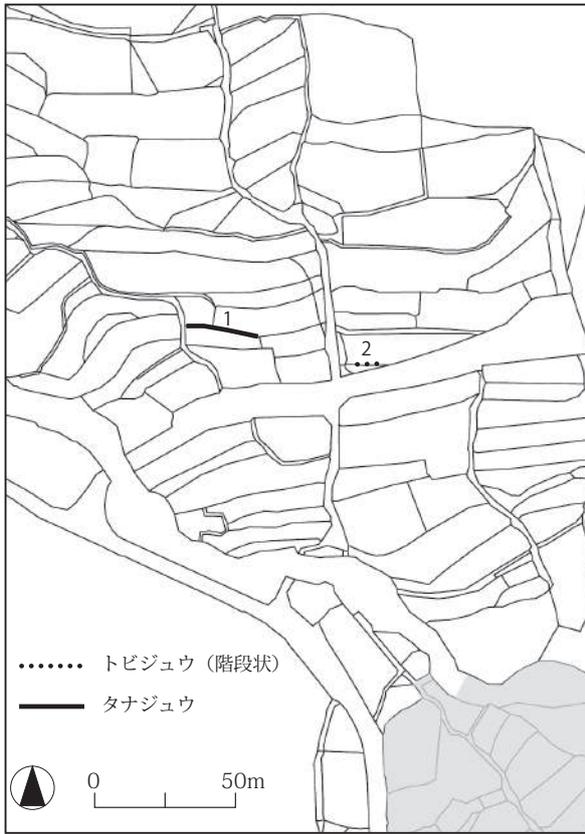


図 11 竹之本のニンジュウ分布



図 12 竹之本 1 (2023/02/12 撮影)



図 13 竹之本 2 (2023/02/12 撮影)

れた状況であった。8 および 9 の各上段面は明治期に水田であり、その後も大きな変化はない（図 19）。なお、9 の西側の細い地筆は明治期に「畑」として利用されていたものである。10 の上段面は明治期に水田として利用されており、その後の合筆などは確認されない。10 については石積みの中央部はトビジュウだが東西はタナジュウとなっている（図 20）。石積み自体の積み方が異なっているため、積み直した段階でニンジュウの構造を変更したことになる。11 の上段面は明治期に水田として利用され、現在に至るまで大きな変化はない（図 21）。11 は岩座神地区を通過する幹線路からもよく視認できるニンジュウの 1 つとなっている。

12 の上段面は明治期に水田として利用されており、前面に里道が通過していた。現在もその状況は同じである。13 は東側と南側のそれぞれに部分的な小段がある。南側の下段前面は明治期に畑地であったものが宅地へと変化している。14 の上段面は明治期に水田として利用されていた。前面は里道であったが、現在は舗装路として拡幅されている（図 22）。そのため、拡幅に伴う法面工事がなされた可能性がある。

15 の上段面は明治期に水田として利用され、合筆などはない。調査時は草が茂っており、トビ

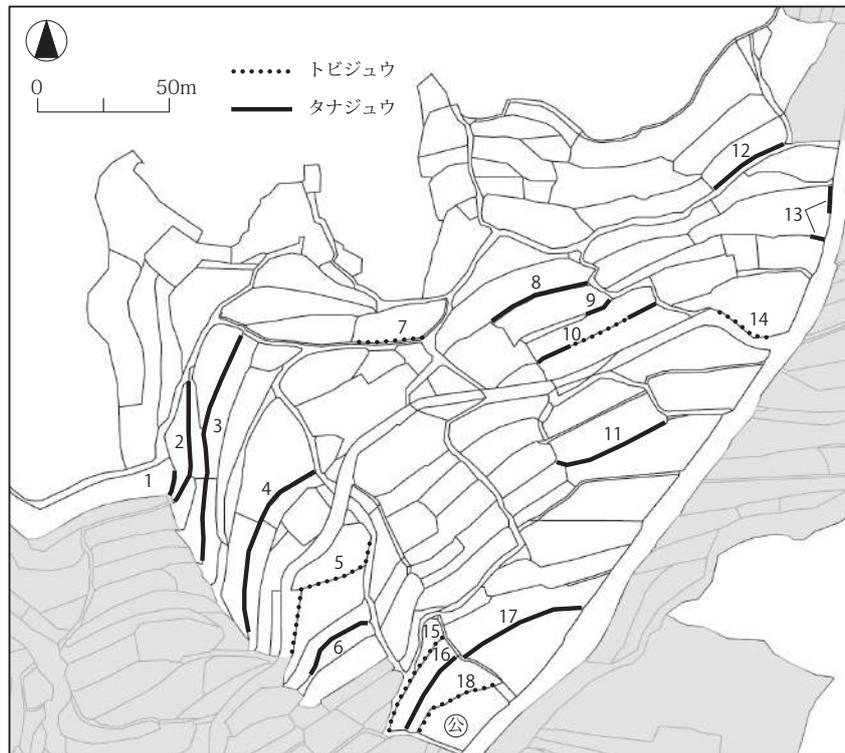


図14 森垣内のニンジュウ分布

ジュウが見えにくい状況であった(図23)。16および17の上段面は、それぞれ明治期に水田として利用され、現在に至るまで大きな変化はない(図24)。17は、4と同じく法面に小段がついているが小段面が突出しているタイプである(図25)。18の上段面も明治期に水田として利用されており、合筆などはない。下段面は田地と畑地であったが、現在は岩座神公会堂が建っている(図26)。

#### ⑤竹之華

トビジュウが2か所、タナジュウが9か所で確認された(図27)。

1と2は東側に里道が通っており、後年、拡幅工事が実施されたことで区画面積が減少しており、タナジュウの一部が失われた可能性がある(図28)。3は法面に石列が連続しているためにタナジュウと分類・表示したが、法面に小段がついているわけではなく、石の突出が連続するタイプである(図29)。張り出しの構造からみればトビジュウに近い。上段面は明治期に水田と利用され、その後、大きな変化はない。4は小段がついたタナジュウだが、小段面の石の一部は突出している(図30)。なお、4の東側は下段が土羽になっており、ニンジュウとは認定できないが段差は続いている。5の上段面は、北側の里道が舗装路に変更されているものの、地筆自体に大きな変化はなく、明治期より水田である。5の東側は小段がつく一般的なタナジュウだが、西側は3と同じような小段がつかず、連続的に石が突出するタイプである(図31)。6はトビジュウで(図32)、現在、上段面は宅地となっているが、明治期には水田として利用されていた。地籍図の表現と現在の地割とは適合



图 15 森垣内 1～3 (2022/08/10 撮影)



图 16 森垣内 4 (2022/08/10 撮影)



图 17 森垣内 5 (2022/08/10 撮影)



图 18 森垣内 6 (2022/08/10 撮影)



图 19 森垣内 8 (2022/08/10 撮影)



图 20 森垣内 10 (2022/08/10 撮影)



图 21 森垣内 11 (2022/08/10 摄影)



图 22 森垣内 14 (2022/08/10 摄影)



图 23 森垣内 15 (2022/08/10 摄影)



图 24 森垣内 16 (2022/08/10 摄影)



图 25 森垣内 17 (2022/08/10 摄影)



图 26 森垣内 18 (2022/08/10 摄影)

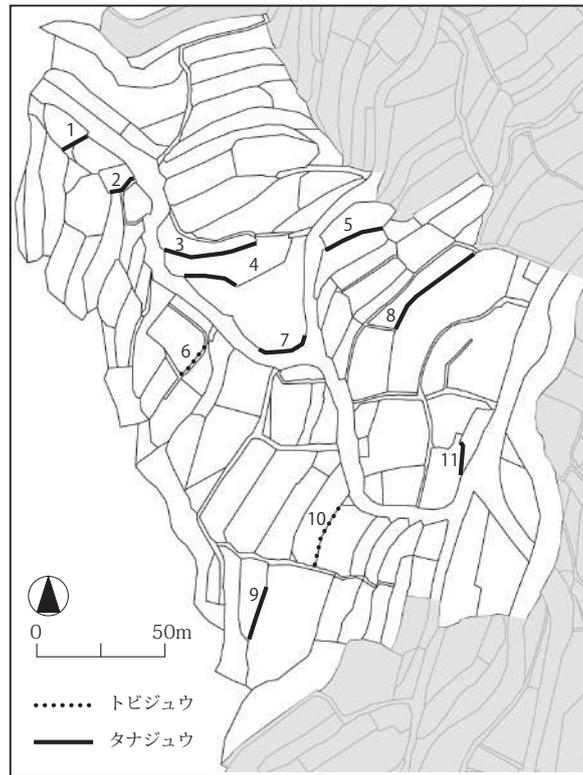


図27 竹之華のニンジュウ分布

しない点もあり、宅地造成ないし別の理由で区画の整理がなされている可能性がある。7は周囲に舗装路が整備されている（図33）。また、明治期は上段面が地筆4枚に分かれていたが、現在は1枚にまとめられている。耕地整理の結果、法面が高くなり、石積みが二段になったのであろう。また、この付近には石積みの上に土羽による法面が築かれた地筆があるのも特徴で、聞き取り調査や7の履歴をふまれば、これらは土地改良を受けた痕跡の可能性が高い。

8のタナジュウも大部分が、3や5のように、小段がつかずに石が連続的に突出しているタイプとなっている（図34）。9は小段のつく一般的なタナジュウだが、下段の下部に土羽があり、三段になっている（図35）。なお、9の下段面は明治期に二筆だった水田が一筆になっている。10は石積みの上に土羽の法面があり（図36）、法面の改良がなされている可能性がある。ただ、10の上段面の地筆は明治期以来、合筆や分筆などの変更は確認できない。11の下段面は水田だったが、現在は「棚田の里ふれあい作業所」が建つ（図37）。

#### ⑥クゴ

トビジュウが2か所、タナジュウが3か所で確認できた（図38）。

1はタナジュウだが、調査時は草が繁茂している部分があった。北側の上段面は明治期より水田として利用されており、合筆などは確認できない。一方西側の上段面は地籍図に地筆がなく、山林図の方に記載されていたと思われる。2の上段面は明治期に水田として利用されていたが、その後、区画及び土地利用に変更がみられる。下段面に変化はなく、2を含む法面も明治期から位置は変わってい



图 28 竹之華 1 (2022/08/10 撮影)



图 29 竹之華 3 (2022/08/10 撮影)



图 30 竹之華 4 (2022/08/10 撮影)



图 31 竹之華 5 (2022/08/10 撮影)



图 32 竹之華 6 (2022/08/10 撮影)



图 33 竹之華 7 (2022/08/10 撮影)



図 34 竹之華 8 (2022/08/10 撮影)



図 35 竹之華 9 (2022/08/10 撮影)



図 36 竹之華 10 (2022/08/10 撮影)



図 37 竹之華 11 (2022/08/10 撮影)

ないように思われるが(図39)、上段面の変化にともなって改修が加わった可能性もある。3は明治期からすでに里道に面していた場所で、現在も舗装路に面している(図40)。道路が拡幅された可能性はあるが、石積みに大きな変化が加えられた形跡はない。

4と5はトビジュウで(図41)、それぞれの上段面は明治期から水田として利用されており、合筆などはなされていない。

以上の結果をふまえると、次のようなことを指摘することができる。

岩座神地区の棚田のうち、ニンジュウを備えた地筆の多くは明治期の地籍図にすでに記載されていた。こうした点はニンジュウを備えていない地筆においても広く当てはまり、岩座神地区の棚田は明治10年代から大きな変化がなく続いてきていることがわかる。その場合、法面の石積みについても、この100年余に新たに積まれたと考えるよりも、地籍図作製時点には現在と同じような状況で

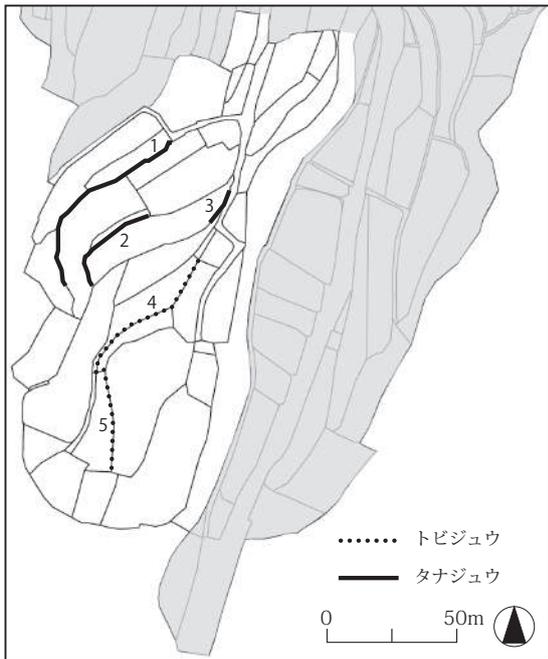


図38 クゴのニンジュウ分布



図39 クゴ2 (2022/08/10 撮影)



図40 クゴ3 (2022/08/10 撮影)



図41 クゴ5 (2022/08/10 撮影)

あったと考えるほうが合理的である。里道の拡幅や新たな舗装路の整備、また部分的な耕地整理は認められるが、現在の岩座神地区の棚田景観の大枠は近世から続く判断してよい。

中島(2004)はトビジュウとタナジュウとの2つのタイプを紹介しているが、実際はきれいに二分されるのではなく、①法面の中位に石が断続的に突出するもの、②法面に小段がつき、小段上が歩行可能なもの、③法面に小段はつかず、石が連続的に突出するもの、④法面に小段が付き、小段面の石がさらに突出するもの、という4つのタイプに分類できる。中島のいうトビジュウは①、タナジュウは②である。今回は中位での歩行可能な石が断続的か連続的かという点を重視したため、③・④もタナジュウとして表示している。ただし、石の突出の仕方からすると、①と③は近似しており、④は①と②の複合である。

とはいえ、現在の地域住民の間ではトビジュウやタナジュウという呼び方は使われておらず、すべてニンジュウと呼称されている。機能としては同一であることとともに、その機能そのものが、利用されなくなっていることが、影響しているのだと思われる。

ニンジュウとはやや異なる機能を有するものとして、間隔を空けて張り出した石によって設けられた階段についても確認された。工法としてはトビジュウと同様だが、トビジュウが平行移動用に設置されているのに対して、こちらは棚田の上下間の垂直移動用に設置されたものである。

また、ニンジュウは岩座神地区の棚田全体に均質に分布しているのではなく、濃淡があることも改めて明らかとなった。俯瞰すると、多田川の左岸を含む藤之迎、九郎右エ門田、竹之本にはニンジュウが少ない。岩座神地区の棚田の分布域は明治期からほぼ変化がないことはすでに指摘した通りだが、上流部を含め、分布するのは基本的に山地の傾斜がゆるやかになった谷底の平地部に限られている。左岸はそうした場所をうまく利用して田畑が作られているということになる。

一方、森垣内、竹之華、クゴにはニンジュウが多い。特に森垣内から竹之華にかけては多く確認できる。これは、この地域が山地から張り出した小さな尾根およびそこからの斜面地にあたり、周囲の棚田に比べると急斜面な立地条件のなかで棚田（畑地を含む）が形成されているからである。

竹之本には中世以前に遡る神光寺があり、多田川最上流部は古くから人の利用があったことは間違いない。一方で、森垣内や竹之華付近は、現在、もっとも家屋が集まる地区であり、多田川の対岸には五霊神社も鎮座する。こうした状況がどの程度まで遡るのかについては不明な点が多いが、少なくとも近世以降における日常生活の中心は下流側にあった。決して広くはない谷筋の中心部としてより高濃度な生活・生業の展開が求められた中で、周囲よりも傾斜の急な斜面地の農地利用が図られた可能性があり、その痕跡がニンジュウの多さとして現れているとみることもできるだろう。

(上杉・藤田)

## おわりに

岩座神地区の棚田について、今回の調査によって確認できたのは以上のような点である。目視による調査であり、不十分な点も多いのは確かだが、ニンジュウの分布や構造のバリエーションについて、いくつかの知見が得られたのは、小さい成果と言えるだろう。聞き取り調査によってニンジュウの使い方や茶の生産に関する理解を深められた点も重要である。この成果をより大きなものとするためにも、より詳細な石積み調査を実施することが求められる。ニンジュウは石積みの高さに深く関わり、今回の調査によっても傾斜との関係性を指摘できたが、そうした点をより明確にするためにも、利用される石の大きさや高さに関する実測調査は必要であろう。また、さらなる聞き取り調査により、水田耕作の慣習や水がかりについて明らかにすることも残された重要な課題である。

こうした点もさることながら、最後に付言しておきたいのは、岩座神地区の棚田の持つ豊かな可能性である。岩座神地区の棚田については、一部で発掘調査がなされ、中世の痕跡が明らかとなっている。棚田を有する山村地域での発掘調査それ自体が珍しく、中世の情報が得られていることは岩座神

地区の景観史理解を大きく助けている。それに加えて、今回の調査では明治期の地籍図を利用することで近代以降の変化の少なさについて確認することができた。このように、岩座神地区の景観史は他の山村地域と比べると歴史的な情報が明らかになりつつある。景観史をさらに編んでいくためには、少なくとも中世から近代の間を結ぶ作業が必須となるが、実は今回の府立大の調査の一環で、岩座神地区に関する近世の検地帳も確認することができ、また五霊神社についての調査も進めることができた（これらの成果は別章を参照のこと）。今後、こうした多様な種類の史資料を相互に関連付けながら利用することで、岩座神地区の景観史がさらに深めることが可能となるだろう。

岩座神地区の棚田は発掘調査・文献調査・建造物調査・古地図調査・民俗調査・景観調査を組み合わせることで、中世から現在に至る山村景観史に迫ることが可能となる稀有な場所なのである。既存の成果に加え、本書の成果も利用しつつ、今後、さらなる研究が展開することを期待したい。

（上杉）

## 謝 辞

末尾となりましたが、聞き取りにご協力賜りました木原伸夫様、木原伸子様、木原均様、木原美雪様、そして調査の全方面に渡りましてご協力賜りました多可町教育委員会の安平勝利様に、感謝の意を捧げます。

## 参考文献

恵那市教育委員会（1999）『恵那市文化財調査報告書』36、恵那市教育委員会

岡島賢治（2014）「棚田をまもる」、棚田学会『棚田学入門』勁草書房

香美町教育委員会（2005）『香美町文化財報告書』9、香美町教育委員会

中島峰広（2004）『百選の棚田を歩く』古今書店

岩座神地域協議会（2016）『ようこそ岩座神へ』、<https://www.youtube.com/watch?v=BKqUUW-mlU>

（2024/02/13 最終閲覧）

### 編集後記

歴史学科2年次の学生を対象に「文化遺産学フィールド実習」の授業を設け、長年にわたって基礎的な調査を実践する場として活用してきた。これまで、数多くの市町でお世話になり、夏休みを中心にフィールドワークをおこない、そのそれぞれの取り組みについては、その後の調査などを経て、単発で報告などにとりまとめてきた。今回、兵庫県多可郡多可町で分野横断的な調査をおこなうことができ、また科研のテーマである山寺研究を裨益する研究成果がまとまったため、本書を編むことになった。多大なご援助をいただいたみなさまに改めて謝意を表したい。(ひ)

### 表紙・裏表紙写真

上左：五霊神社の調査風景（菱田哲郎撮影）

上中：旧神光寺跡の調査風景（菱田哲郎撮影）

上右：岩座神地区文書の調査風景（東昇撮影）

下：岩座神地区の棚田景観（安平勝利撮影）

裏表紙：神光寺仁王門と千ヶ峰（岸泰子撮影）



京都府立大学文化遺産叢書 第29集

### 播磨神光寺と岩座神地区の文化遺産

編集 菱田 哲郎（京都府立大学文学部教授）  
岸 泰子（京都府立大学文学部准教授）  
発行 京都府立大学文学部歴史学科  
〒606-8522 京都市左京区下鴨半木町 1-5  
発行日 2024年3月29日  
印刷 株式会社 北斗プリント社  
〒606-8540 京都市左京区下鴨高木町 38-2